

ハイデガーと政治的なもの—有限性の形而上学からピュシスの問いへ

本稿はハイデガーの基礎存在論とその独自のピュシス論から、政治的なものの生成の一つの相を明らかにし、その存在論から開かれるそのものとしての政治的なものを、現代哲学、現代政治との連関において提示する。

## 1 基礎存在論が開く政治的なもの

ハイデガー自身の言によれば歴史的な決定に参加する者は政治的なもの *das Politische* を語る必要がない(GA39,214)。基礎存在論によれば、世界のなかに投げ込まれた現存在はその固有の存在の問いのうちにあつて、誕生から死に至る私の有限性において過去を引き受け未来へと投企することで、すなわちそのつど私のものである先駆的決意性を遂行しつつ、あらゆる事象を存在から思考し直すことです。すでに歴史的であり、政治的なものの本質に存在論的に関わるのだから。このことは伝統哲学にいかなる革新をもたらすのか。まずここで古典的意味での「本質」とは「何であるか *Wassein*」であるが、ハイデガーによれば、それはその実存にある。客観的な「政治的なものの本質」が概念として実在するのではない。政治的なものの本質とは、まず私たち一人一人の固有の経験から出発して前了解され、その後他者たちを含む世界のなかから私たちがそれぞれに存在論的呼び求めを聴き取ること、私たちにとっての政治的なものの意味として現成してゆく。この本質すなわち政治存在が歴史において顕現するに至ることが真理であり、私たちが世界を構成するのはこのようにその存在を介してである。こうした意味において、現存在の存在論的行為にすでに政治的なものが含まれているといえる。

さて西洋哲学の伝統においては、古代ギリシャ以来政治は哲学の知の実践として特権的領域であった。われわれの行うところのすべてを覆う最高善、人間というものの善こそが、最も有力な最も棟梁的な位置にある政治の究極目的でなくてはならないとされた(『ニコマコス倫理学』1094b)。アリストテレスによれば人間はまず政治的動物なのであって(『政治学』1253a)、善、人間、政治が一体化して「うるわしく神的なもの」として主導的である。とはいえここからアリストテレスが論じるのは、プラトンの構想した哲学者の国家ではなく、正義の公正な分配を実現できる「最善の国制」についてであった。アリストテレスはすでに哲学者の探求する最高善と事実的ポリスとの根源的亀裂を見てとっていたのだろうか。ここにポリスの最高善とは別の、近世の社会契約、現代のリベラル民主主義に至るま

で、正義の正しい分配としての政治哲学が始まる。それは最高善としての政治を断念したとはいえ、正義という理念において、あるいは人間そのものの規定において、なおそっくり哲学の実践的遂行の領域に属しているのではないだろうか。

だとすればハイデガーがその基礎存在論でもたらした西洋形而上学の革新は、それだけで政治的なものの基盤を根本的に揺るがすことになりうる。ハイデガーが目指すのはあらゆる存在者をそのものとして記述する形而上学としての存在論である。このアリストテレスの第一哲学の規定に導かれたハイデガーの存在論の前提は、ポリスや正義の概念に先行する現存在であり、理性をもった動物とは別の生き物である。動物と同じように世界のなかに投げられているが、そのロゴスとは理性に根源的に先行するある別のロゴスであり、動物に何らかの規定が付与されたのではなく、そのものとしての存在者を顕わにすることで世界を構成する力をもつ別の生き物なのである。この存在論の前提はギリシャのポリスが排除したすべての存在者、すなわち奴隷、外国人、女性、もしかすると動物をも呼び入れ、誕生から死までの有限な記憶と想像力において幼児や高齢者をも原理的に含みこむことができるのだろうか。

近代の社会契約理念で基礎づけられた均質な政治的主体とその共同体への合一、配分的正義の前提もまた、このハイデガーの存在論によって揺るがされるのだろうか。世界のなかに投げられた現存在は根源的に時間的存在でもあって、誕生から死までの有限な伸張のうちにあつて先駆的決意性を遂行する。すなわち相続された伝承から自ら選びとった可能性を自己へと伝承することで、現存在は自ら歴史を創り、歴史的である<sup>1</sup>。社会契約の均質な超時間的主体は、自らの固有の実存を担う主体、西洋の伝統とは異なる伝承をも担う主体、誕生から死までの時間において生成する有限な主体で置き換えられることになる。

政治哲学は宗教や伝統的形而上学の揺らぎを前にして、もはやそのような正義に依存しない政治的なものの独自の存在論に基礎をおく必要に気づき始めている。正義を経済的財と解釈する傾向はその一例である。あらゆる存在者をそのものとして記述することを目指しているハイデガーの存在論は別の解決をもたらすことができるだろうか。それは私たちの事実的な政治的体験から出発して、そこからすでに構成された諸概念を排去して根源的経験に遡行し、この領域に固有な意味の地平としての事象の恒存的諸関係を規定するものを見出すように促す。それは所与の正義のプログラムを効果的に遂行するのではなく、私

---

<sup>1</sup>歴史とは実存する現存在の時間のなかでの生起であり、そのなかで過ぎ去り伝承されているものが強い意味で歴史となる (SZ,379)。

たちの固有の有限な経験から出発して、他者たちとともにある世界の新たな意味を付与する地平となって私たちの思考を開くのである。すなわち政治の存在から政治を思考することによって、政治的なものがつねにあらたに開かれてくるのである。現代の政治哲学がこれまでの公私の区別を超えた領域においても政治的なものを見出しているのは、このような解放する思索に触発されてのことではないだろうか。たとえば地域社会に根ざした、あるいは国境を超えた個人や組織の社会変革活動、さらには家庭内の役割の再定義もまた国家の活動に劣らない政治的な活動とみなされている<sup>2</sup>。

ハイデガー存在論がこうした多様な領域での触発を原理的に可能にしているのは、それがアリストテレスの形而上学の構想、存在するかぎりのあらゆる存在者をそのものとして現れさせることを目指しているからである。基礎存在論で記述されたこの存在論の齎す伝統哲学のラディカルな変革は、主体対象関係に先行する世界内存在の事実性、誕生から死へと伸張する死へ臨む存在としての現存在の有限性という二重の限界に基礎づけられている。この二重の限界を承認することが新たな意味の地平を開き、新たな自己を構成し、そこから世界を構成し歴史を開くのである。ここで『存在と時間』でハイデガーが *Endlichkeit* の語を用いるのは、死すべき存在としての現存在の規定に限定されているのであって<sup>3</sup>、世界内存在の事実性ないし本来的現存在の企投の挫折という意味での有限性については別の語が用いられている。それは存在の命運 *Geschick* に委ねられ、現存在そのものは不確実性への投企へと開かれている。

死へ向かって開かれた自由のみが、現存在に端的な目標を与えて、実存をおのれの有限性のなかへ突き入れる。みずから選び取った実存の有限性は、現存在を自己の運命の単純さのなかへ連れ込む。…運命的現存在は、世界内存在であるかぎりでは本質的に他の人々との共同存在において実存しているので、その生起は共同生起であり、*Geschick* として規定される (SZ,384)。

この *Geschick* がいかに経験されるかは、『存在と時間』では解明されずにとどまった<sup>4</sup>。

このような運命としての生起が、いったいどのようにして、誕生から死に至るまでの現存在の連関全体を構成するといふのか、この点はいっそう謎に包まれている (SZ,387)。

---

<sup>2</sup> こうした現代政治の動向については本稿末尾の文献表を参照されたい。

<sup>3</sup> 同時期の他の著作では被投性を有限性と記述する箇所もある。

<sup>4</sup> ジャック・デリダはこの命運が計算的決定的なものではなく、郵便のように偶発的に誤配を生ずることもあることを、書簡体小説の形で示そうとした。『絵葉書』参照。

これを解明するには存在をそのものとして記述することが必要であり、存在とピュシスを重ねる中期思想によって初めてその様相が明らかになり始める。

## 2 ピュシスが開く政治的なもの

こうした基礎存在論はその後まもなく変容したかのように見える。ここで再びハイデガー自身の言によれば、いわゆる転回とは当初の立脚点の変更ではなく、伝統的な主観性の形而上学を放棄する別の思索を遂行することで、存在忘却という根本的経験に根ざした次元に到達するためであった(GA9,328)。現存在の有限性や被投性に代わって存在そのものをピュシスとして記述する試みが始まるのは1935年講義『形而上学入門』であり、以後このピュシスは後期に至り存在の語が抹消されるまで様々に問われ続けている。『形而上学入門』によれば、ギリシャ的に解釈された存在とはピュシスである。すなわち、「現れ出ながら滞留しつつ支配すること *Walten*、輝きながら出現すること」(第38節)である。ピュシスをこのようにアレテイアの運動のうちに理解することで、存在を恒常性としたパルメニデス、生成変化するものとしたヘラクレイトスの規定がともに支持されることになる。すなわち存在そのものは恒常的であるがそのものとしては現出せず、それが存在者において現出する相において生成として了解されるのである。この存在論の記述の構想の転回は、初期の基礎存在論にいかなる解釈をもたらすのだろうか。

『存在と時間』の冒頭でハイデガーは『ソフィステス』を引用しながら、存在問題を了解することの哲学的な第一歩として、「おとぎ話をやめる」べきことを述べていた(SZ,6)。存在があたかも存在者であるかのように他の存在者に還元して説明するのをやめるのである。そのものとしての存在は存在しないため、これを表象するには「存在者を発見する様式とは本質的に区別されるような、特別の挙示様式を必要とする」とされていた。このため平均的日常における現存在によって存在がいかに経験されるかの記述が試みられていた。とはいえ『存在と時間』以後のこうした記述は1929/30年講義『形而上学の根本諸概念』での動物比較による展開にとどまり、むしろ伝統的哲学テキストの読解において存在がいかに経験されるかという解体的読解の余白で試みられていたにすぎなかった。

『形而上学入門』でハイデガー独自のピュシス観が展開されるのは、そのロゴスとの共属性においてである。このピュシスはたんなる自然として解されるのではなく、人間との相互作用としてのロゴスと一体化したものとして現れる。しかもそのロゴスとは、さしあたり言語、言葉、語りとは何の関係もなく、「集めること」を意味するのだとし、ヘラクレ

イトスの断片「すべての物事はロゴスに従っている」「ロゴスは共通なもの、あまねくあるもの」がこの言葉の本来の意味に対応しているという。ここでハイデガーが強調するのは、言語に先行する存在了解ということである。

純粹に聞き従うことは耳や口とは何の関係もない。むしろそれは、ロゴスがそれであるところのもの、すなわちそのものとしての存在者の集められてあることに向き合って、それに従うことを意味する(GA40,138)

ハイデガーがヘラクレイトスとパルメニデスの言に従って説く原初のロゴスとは、たんに言葉として語り聞かれるのではなく収集 *Versammlung* としての存在に向き合ってそれを聞き知ること *Vernehmung* とされる<sup>5</sup>。収集とは対立するものを一つの共属に保持することである。このような言語に先行する根源的次元から人間が了解されたのちに「ロゴスをもつ動物」という定義がなされるとされる。ここにおいて『存在と時間』では未規定に残されていた存在の規定の一端が明かされたことになる。そこでは「人間とは何か」ではなく「現存在とは誰か」と問うことが要請されていた(第25節)。私たちが自ら固有なものとして存在を問うことでのみ歴史が生起するとされていた(第72節)。『形而上学入門』でハイデガーがヘラクレイトス、パルメニデスの断片に読み解くのは、まさにその反復であり、存在そのものの本質から人間を規定することである。ここから基礎存在論は以下のようにある方向付けを強調して語り直される。

存在は人間が問うことによっておのれを開く。そこでのみ歴史が生起する。そしてそれとともに、人間が存在者そのものとの対決へと危険を冒す力の源である、人間のあの存在もまた生起する。

この問いながらの対決が、人間を、初めて、彼自身がそれでありまたあらねばならない存在者へと連れ戻す。

人間は、問いながら歴史的な者として、初めて、自己自身に到来し自己である。人間の自己性とは次のことを意味する。人間におのれを開く存在を、人間は歴史へと変容し、その中で自己を存立させなければならない、ということである。自己性とは、

---

<sup>5</sup> *Vernehmen* はすでに『存在と時間』でも *noein* の訳語「覚知」として導入されていて(SZ,33)、見えるようにする挙示的ロゴスが誤らせることもあるのとは対比して、根源的意味において真であり、つねに発見的で覆い隠すことがありえないとされる。同書では規定する作用(SZ,62)が強調されたが、ここでは受容的作用が強調されている。この後『哲学への寄与』において *noein* はさらに内立性 *Inständigkeit* と対比されるが(GA65,265)、このキーワードもヘルダーリンの詩行から着想されており(GA39,266)、原的な意味作用「切迫」の含意も忘れてはならないだろう。

人間がまずもって自我であるとか、個別者であるとかを意味しない。人間は個別者でもなく、われわれでもなく、共同体でもない。(GA40,152)

しかしこれはまだ一般的指示であり、十分ではないとされる。ハイデガーはさらにソフォクレス『アンティゴネー』の詩行解釈によって存在の本質規定としての抗争を際立たせていく。この合唱歌によれば、人間はもっとも不気味なものであって、圧倒的に支配する。このわずか 40 行ほどの詩行においてハイデガーは人間存在の原初的不気味さの度を越した暴力性を読解している。人間は圧倒するもののさなかにおいて力を振るい、狂気、破滅、不幸が彼を襲う(GA40,161)。生き物をその秩序から引き離し収奪し征服する(GA40,163)。こうした原初的不気味さは始原の純粹さを前提する進化論を転倒させる。また詩句に忠実に読解すれば、言語、了解、気分、激情、耕作はもはや人間に属する力ではなく、それ自体が人間をくまなく支配する(GA40,165)。人間は主観客観の認識論以前に世界に投げられているのであり、人間が発明したとされる構築物だけでなくその発するあらゆる表現や行為もまた発した者の意図を超えて他の人々を拘束し支配することになる。人間がそれらを発明したのではなく、自らの被投性においてそのなかで自己を見出すことになる。よってこうした構築物や発散それ自体が人間の能力の証明になるのではないことをハイデガーは強調している。

そうではなくてそれ[人間の能力の証明]は、人間が存在者の中へと侵入することにより、存在者がそのものとして開示される根拠となる諸力の制御であり調節である。人間は力の行使において初めて存在者のさなかで自分自身である、すなわち歴史的であるのだが、そのために人間は上に述べた力を使いこなさなければならない。存在者の開示とはその力のことである(GA40,166)。

人間の力の行使は存在者の開示のためにそれを使いこなすことにあり、仮象にまきこまれ自己を存在から締め出すことになってはならない。すべての力の行使の唯一の挫折としての死があること、自らを有限な死すべきものとして知ることにおいてはじめて、眼前にあるものを超えて存在との連関において存在者に規定を与え、存在を存在者のうちに開示的に実現することができる。

現れ出るものとしての作品において、支配する出現すなわちピュシスが輝くのである。存在者として形をとった存在としての藝術作品によって、それ以外のすべての現出者、まだそこにあるだけのものが、初めて存在者として、あるいは非存在者として、確証され、接近可能となり、解釈可能となり、了解可能となる(GA40,168)。

ここでハイデガーはヘラクレイトス、パルメニデスの言葉から導いた「聞き知ること」としてのロゴスに対し、ソフォクレスの詩句から読解した人間の行為の不気味さの競り上げを重ね合わせ、哲学的思索だけでは言い尽くせない人間の決定の次元の関与を存在の開示のための必然として記述する。そこには圧倒的で不気味な暴力が伴う場合もあるが、それが存在のための決断であるかぎりでは肯定されている。そして存在とは対立するものをもとに保持するのであり、いずれか一方を無にすることとは無縁である。『存在と時間』では命運 *Geschick* に委ねられていた現存在の企投の成り行きはここにおいて明確に規定され、現存在の正しい決定を導くことになる。

聞き知ることがそうなりうる〔存在、無、仮象の三差路に立つ〕のは、ただ、それが、無に反対し、存在のために決断し、それゆえに、仮象と対決する場合のみである。だが、このような本質的決断は、その遂行と維持において、絶えず押し寄せる日常的で習慣的なものの中への纏れ込みに対して、力を用いなければならない (GA40, 177)。人間存在とは以下のことを意味する。収集すること、存在者の存在の収集する聞き知り、現象を知によって作品のなかへ置くことを引き受けること、そうして隠れなきことを司ること、隠れなきことを隠蔽に対して守ることである (GA40,183)。

原初のこの存在論の構想は、基礎存在論が未規定に残した *Geschick* の成り行きに規定を与える一方で、ソフォクレスの詩行が顕わにするもっとも不気味なものとしての人間の様相によって私たちを困窮に陥れ、存在、無、仮象の三叉路において切迫した決断を迫るのである。ここで登場していた存在論的主宰の作用 *Walten* は、狭義の自然のみならず他者一般、およびその間接的介入を含意する言語やイデア性などの構築物をも含む他者性一般、有限な存在者が経験する他者一般としての存在が及ぼす根源的力であって、現存在はその力に聞き従うだけでなく、もっとも不気味なものとしてその力に抗して企投することがある。人間は存在の開示を求めて闘争するだけでなく、仮象の道に突き進むこともあり、無の道に自らを陥れることもある。ソフォクレスの詩行が描き出すのはこうした人間の行為である。この *Walten* は存在論的作用であって、すなわち客観的な力として実在するのではなく、私たちがその固有性において存在の意味を問うときに、それに抗する力として浮上るのである。政治的なものの意味を最大限に拡大しそれに意味を与えている超越論的地平を画定すれば、それは他者一般の支配する作用である。あらゆる政治的なものの起源には他者の支配への抵抗がある。言い換えれば、*Walten*こそが存在と存在者との抗争一般、すなわち政治的なものの領野を開くのである。そこから出発して私たちは別の正義、別の政

治への可能性を開くことができるだろう。

こうした原初のピュシスを聞き知るロゴスがいかに忘却され理性となるに至ったか（ロゴス中心主義）、その生成的側面が忘却され現前するアイデアとなるに至ったか（現前の形而上学）、すべてが眼前にある特別の種類生物すなわち最善の動物に基づいて決定されるに至ったか（存在神論）についても、ハイデガーはさらに解明を続けている<sup>6</sup>。「人間はロゴスをもつ動物である」（『政治学』1253a）というアリストテレスの有名な規定はすでに原初のロゴスの忘却である。ハイデガーによれば人間は動物に何物かが付加される序列のうちの最高のものではなく、世界を構成できるまったく他なる生き物であり、原初的ロゴスは人間の発明した道具ではなく、存在の作用の一つとして人間を基礎づけている。「ピュシスとは人間をもつロゴスである」というのが正しい規定であるとハイデガーはいう。

ロゴスはとうの昔に、悟性や理性という能力へ浅薄化された。この能力そのものが、眼前にある特別の種類生物に基づいて、すなわち「最善の動物」に基づいて、基礎づけられるのである(GA40,184)。

かくして聞き知るという原初のロゴスは忘却され、思考が存在を支配するようになる。この忘却の発端はアイデアとしての存在了解であるとハイデガーは規定している。アイデアの語源エイドスは外観を意味することで、存在が自ら現前する恒常性である。このことはたしかにピュシスが現れ出つつ輝くことの帰結ではあるが、帰結が本質そのものへ高められることがあってはならないとハイデガーは論じている。なぜなら自己を存立へもたらすこととして空間を占拠するという生成的相が脱落するからである。この生成的運動を聞き知ることが原初のロゴスの作用であった。アイデアはピュシスの結果であり、ピュシスそのものと誤解されてはならない。

存在は聞き知ることから、ただ聞き知られたものとして把握されるべきでなく、聞き知ることが存在のためにある。聞き知ることが存在者を開示する仕方は以下のように

---

<sup>6</sup> ロゴス中心主義、現前の形而上学はジャック・デリダが1967年『グラマトロジーについて』、『声と現象』で創出した語であり、デリダはこれらにより当時ハイデガー存在論とともに最先端の知として流行していた構造主義とフッサール現象学を相手取り、それらのテクストにおける存在忘却の様相を指摘した。これらの用語が当時のフランス知識人に直ちに受容されたのは、1958年に仏訳された『形而上学入門』がすでに十分に浸透していたことを示している。同様に最晩年のデリダは2002年のセミナー『獣と主権者』において、ジョルジオ・アガンベンが『ホモサケル』でビオスとゾーエの概念に依拠して生政治を立論することを強く批判するが、アリストテレスのこの規定に依拠することは根源的ロゴスの忘却に等しいと見るからである。存在神論はハイデガーの造語であり、この後「ヘーゲルの経験概念」（1942年）で初めてこの意味で使用された。

なくてはならない。すなわち、聞き知ることが存在者その存在のなかへ戻し立て、その存在者が表象されるという事実に関して、また何として表象されるかに関して、その存在者を把握する(GA40,192)。

存在者その外観だけでなくその生成の由来とともに聞き知ることが、その存在を了解することである。これは形而上学としてのハイデガー存在論の企投全体を支える時間性の必然性の根拠である。これを存在のために、真理として主張することがハイデガーの政治的主張である。

### 3 ハイデガーが開く政治的なもの

最後にもう一度ハイデガー自身の言によれば、彼はそのニーチェ講義においてナチズムと対決した<sup>7</sup>。すなわち総駆り立て体制 Gestell 批判、生物学主義批判において。生物学主義は 1936/37 年最初のニーチェ講義（『ニーチェ』第 1 部「芸術としての力への意志」）で力への意志の評価の指標となり、1939 年夏学期講義（『ニーチェ』第 3 部「認識としての力への意志」）では全面展開されている。この講義の未講の最終部とされる『ニーチェ』第 4 部「等しいものの永劫回帰と力への意志」の冒頭では、力への意志と形而上学との断絶の根拠として言明される<sup>8</sup>が、戦後『ヒューマニズム批判』においては、生物学主義が形而上学と同一視されて批判されることになる(GA9,322-325)。

Gestell はニーチェ講義では当初「作ることの支配 Machenschaft」として『ニーチェ』所収の諸草稿第 4 部、第 10 部「形而上学の内への回想」に登場するが、第 9 部「形而上学としての存在の歴史に向けての諸草案」で両者は同一視される<sup>9</sup>。Gestell の語そのものは、この時期に執筆されたとされるが戦後に公表された論考「ピュシスの本質と概念について。アリストテレス『自然学』B1」において初めて、原初的ピュシスを隠蔽する作用の一環として構想されている<sup>10</sup>。

---

<sup>7</sup> 「1936 年には一連のニーチェ講義が始まりました。聞く耳を持っていた人はみんな、これがナチズムとの対決であったということを聴き取りました」（「シュピーゲル対談」邦訳 p.378）。

<sup>8</sup> 「力への意志の思想は、とりわけその生物学主義的形態において、この構想の領域から外れ、形而上学の伝統を完成するというよりも、むしろ奇形化と平板化によってその伝統を途絶するかのように見える」（GA6-2,1）。

<sup>9</sup> 「作ることの支配（集立）」（GA6-2,429）

<sup>10</sup> 「ピュシスは見相 Aussehen のうちに集め立てること Gestelltheit（『自然学』第 2 巻第 1 章 193b-18）」（GA9,281）。ここでアリストテレスは見相としてのピュシスを言明しつつも生成としてのピュシスも

戦後においてはとりわけ形而上学批判、技術批判として展開されたこうした主張はすでに崩壊した政権についての事後的な論評としてではなく、まさにその政権の猛威と迫害を耐え抜きつつ<sup>11</sup>、新たな時代へ向けて練り上げられ公表されてきたことを私たちは忘れてはならない。ナチズムや全体主義といった現前するものの表象についてではなく、その反存在論的特性を *Walten* の根源的作用としての存在論的生成から特定して警告することにおいて、ハイデガーは存在者をそのものとしてその存在から思惟すべきことを私たちに教え、現代の政治に伏在する危機の様相を明るみに出すことを可能にするだろう。このような超時間的に遍在する存在論的意味作用は、諸概念に最も普遍的な超感性的に把握される諸規定であり、中世哲学の意味での超越概念であることで、超越論的と名指すことができるのではないだろうか<sup>12</sup>。

存在論的主宰 *Walten* の現実化としての *Gestell* の猛威に晒された状況においては、もはや存在者的手立てで対応することはかなわず、存在論的対処が必要となる。ジャック・デリダがアリストテレス『エウデモス倫理学』の一節「本来の意味で政治的行為とは、できるだけ多くの友愛を作り出す」(1234b-22-23)に着目するのはこのような背景からである<sup>13</sup>。一見したところ、友愛を作り出すことは暴力への最良の抵抗であるように見えるし、暴力の絶えない現代の諸動向を規制する政治に必須の条件と見えるかもしれない。しかしこの意味深い格率が開いたと同時に閉じてもいる民主主義の救済の両義性について、デリダはハイデガー存在論に従って粘り強く分析して見せる。この結果顕わになる友愛の本質とは、友人は少ないほどよい<sup>14</sup>という正反対の帰結であり、政治的なものの謎となって留まり続ける。マーサ・ヌスバウムにとってこの友愛の最大化とは民主主義のアクターを最大限に拡大することである。兄弟愛としての友愛が排除してきた女性から始めて障害者、外国人、動物へと正義の分配手法を拡張するヌスバウムの構想は、存在論と技術的手法の競り上げが交差する領域に触れようとしている<sup>15</sup>。

---

捨てきれない見解を表明しており、ハイデガーはここに着目するのである。

<sup>11</sup> 総長辞任後終戦までの11年間、ハイデガーの講義は監視され、著作は回収され、国際学術活動派遣から排除され、「全く不要な教員」として土木作業に従事させられた（「シュピーゲル対談」邦訳 p.378-381）。

<sup>12</sup> ジャック・デリダ『グラマトロジーについて』第1部第1章「書かれた存在」ではハイデガー存在論が言語的前了解に依拠する点に着目し、これを痕跡と差延で一般化する議論がなされる。

<sup>13</sup> ジャック・デリダ『友愛のポリティックス』第1章参照。

<sup>14</sup> 私たちがもっとも強く友愛を感じるのは、自分にもっとも近い友人に対してであることが友愛の真理であるとすれば、それは反存在論的な事象となりうる。

<sup>15</sup> マーサ・ヌスバウム『正義のフロンティア—障害者・外国人・動物という境界を超えて』参照。

引用文献

Heidegger, Martin

*Sein und Zeit*(1927), Max Niemeyer, 2006

GA *Gesamtausgabe*, Vittorio Klostermann, 1975-

GA6-1 *Nietzsche I* (1936-1940), 1996

GA6-2 *Nietzsche II* (1940-1946), 1997

GA9 *Wegmarken*(1919-1958), 1976

GA29/30 *Die Grundbegriffe der Metaphysik. Welt–Endlichkeit–Einsamkeit*, (1929-1930), 1983

GA39 *Hölderlins Hymnen »Germanien« und »Der Rhein«*(1934-1935), 1980

GA40 *Einführung in die Metaphysik*(1935), 1983

GA65 *Beiträge zur Philosophie(Vom Ereignis)* (1936-1938), 1989

「シュピーゲル対談」(1966年9月23日)、川原栄峰訳『形而上学入門』所収、平凡社ライブラリー、1994年

Derrida, Jacques

*De la grammatologie* (1965–66), Minuit, 1967 (『根源の彼方に—グラマトロジーについて』、足立和浩訳、現代思潮社、1972年、1974年)

*La voix et le phénomène. Introduction au problème du signe dans la phénoménologie de Husserl*, Presses Universitaires de France, 1967 (『声と現象』、林好雄訳、ちくま学芸文庫、2005年)

*Positions* (1967–71), Minuit, 1972 (『ポジション』、高橋允昭訳、青土社、1981年)

*La carte postale – de Socrate à Freud et au-delà* (1975–80), Flammarion, 1980 (『絵葉書』、若森毅・大西雅一郎訳、水声社、2007年)

*Politiques de l'amitié*, (1988-93), Galilée, 1994. (『友愛のポリティックス』、鶴飼哲・大西雅一郎・松葉祥一訳、みすず書房、2003年)

*Séminaire : La bête et le souverain, volume 1 (2001-2002)*, ed. Michel Lisse, Marie-Louise Mallet et Ginette Michaud, Galilée, 2008 (『獣と主権者』 I、西山雄二・郷原佳以・亀井大輔・佐藤朋子訳、白水社、2014年)

現代政治哲学参考文献

- 小林正嗣「ハイデガー—存在論的政治の可能性」、『岩波講座政治哲学』第4巻、岩波書店、2014年
- 小林正嗣『マルティン・ハイデガーの哲学と政治』、風行社、2011年
- 小野紀明『ハイデガーの政治哲学』、岩波書店、2010年
- 松葉祥一『哲学的なものとの政治的なもの』、青土社、2010年
- Nussbaum, Martha, *Frontiers of Justice*, Harvard University Press, 2006 (神島裕子訳、『正義のフロンティア—障害者・外国人・動物という境界を超えて』、法政大学出版局、2012年)
- Mouffe, Chantal, *On the Political*, Routledge, 2005 (『政治的なものについて—闘技的民主主義と多元主義的グローバル秩序の構築』、酒井隆史監訳、明石書店、2008年)
- 宇野重規『政治哲学へ—現代フランスとの対話』、東京大学出版会、2004年
- Butler, Judith, Laclau, Ernesto, and Zizek, Slavoj, *Contingency, Hegemony, Universality: Contemporary Dialogues on the Left*, 2000 (『偶発性・ヘゲモニー・普遍性—新しい対抗政治への対話』、竹村和子・村山敏勝訳、青土社、2002年)
- Zizek, Slavoj, *The Ticklish Subject: The absent center of political ontology*, 1999 (『厄介なる主体—政治的存在論の空虚な中心』、鈴木俊弘・増田久美子訳、青土社、2005年)
- Rancière, Jacques, *La Méésentente*, Galilée, 1995 (『不和あるいは了解なき了解—政治の哲学は可能か』、松葉祥一・大森秀臣・藤江成夫訳、インスクリプト、2005年)
- Thiele, Leslie Paul, *Timely Meditations: Martin Heidegger and Postmodern Politics*, Princeton University Press, 1995
- Beck, Ulrich, Giddens, Anthony and Lash, Scott, *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*, Polity, 1994 (『再帰的近代化—近現代における政治、伝統、美的原理』、松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳、而立書房、1997年)
- White, Stephen, K., *Political Theory and Postmodernism*, Cambridge University Press, 1991 (『政治理論とポストモダニズム』、有賀誠・向山恭一訳、昭和堂、1991年)
- Young, Iris Marion, *Justice and the Politics of Difference*, Princeton University Press, 1990
- Nancy, Jean-Luc, *La communauté désœuvrée*, Christian Bourgois, 1986 (『無為の共同体』、西谷修・安原伸一朗訳、以文社、2001年)
- Schürmann, Reiner, *Le principe d'anarchie : Heidegger et la question d'agir*, Seuil, 1982 (*Heidegger on Being and Acting : From Principles to Anarchy*, Indiana University Press, 1987)